

目を見張るほどカラフルな鳥が、ボリビアのアンデスのふもとにある乾いたピーナッツ畑から飛び立つのを見る時、違和感を覚える。コンゴウインコは、ブロメリアとトロピカルフルーツがぶら下がる熱帯雨林のキャノピにいるものだと、我々の多くは思っているからだ。

去年の一月に2度目の訪問をしたが、アカミミコンゴウは、やはり何か場違いな感じがする。ほとんどの餌場が農地に変えられてしまった世界でもユニークなこの一角で、生き延びているアカミミコンゴウの様子は、鳥自身とその生存を脅かす原因をよく調べるようにと我々を励ましてくれるようでもある。

何十年もの間、オウム保護をしている者達は、絶滅の危機に瀕するアオコンゴウインコ(*Cyanopsitta spixii*), スミレコンゴウインコ(*Anodorhynchus hyacinthinus*), コスミレコンゴウ (*Anodorhynchus leari*), アオキコンゴウインコ(*Ara glaucogularis*), ヒワコンゴウインコ (*Ara ambigua*) に注目してきた。アカミミコンゴウは何千羽という数字を保持してきたのだから大丈夫だと思いつつ。この種について知られていたことを調べた後、アカミミコンゴウは、実際にはこれまで受けていたより多くの保護が必要であるのではないかと心配になってきた。

野生動物写真家であり、医者でもあるビル キング氏の寄付と、保護活動家たちが行うピッツバーグ ナショナル エイヴィアリー (Pittsburgh's National Aviary) での鳥が自由に飛べるショーのおかげで、我々は、この種の繁殖個体群を調べる調査を始めることができた。水浸しになったベニ州の湿地を、アオキコンゴウインコ調査のために、歩きつづけた何ヶ月もの後、トア カイリは、アンデスの東の斜面にある乾いた谷へ向かった。アカミミコンゴウインコの知られている、報告されている、または、うわさにされている繁殖地を調査するために。

その他の絶滅の危機にある種の鳥と同じように、我々はもっと多くの個体が見つかるようにと希望を持っている。例えば、コスミレコンゴウのセハ ブランカ岸壁、または、ミカドインコの新たに見つかった個体群などのようにである。しかしながら、このような発見がされるまでは、アカミミコンゴウは、今わかっている個体群がすべてであると見ておいたほうがいいであろう。すでに発表されている科学文献や、この種の現在の状態を知っている多くの人に尋ねてみると、この種の状況はあまり好ましいものでないことがわかってきた。今までに言われてきた脅威のほとんど——繁殖地の損失、巣からの違法捕獲、成鳥の捕獲と狩猟——は、現在でもこの種の存続を脅かしている。これから2年ほどの間、我々は、すでに知られている個体群を保護し、特に被害を与える脅威を理解し、それを解決するために、個体数の回復努力を促進する計画だ

ジェイミー ジラルディ

## Mountain Macaws

山のコンゴウインコ達 (日本語意訳)

### The race to save Bolivia's beautiful Red-fronts

ボリビアの美しいアカミミコンゴウインコを救う戦い

## トア カイリからの報告

今日は、いまのところ調子がいいようだ。アカミミコンゴウの巣を岸壁に見つただけではなく、つがいが飛びながらディスプレイをすところも見れた。午後には、血のように鮮やかな赤土の露出部分の間にある小さな峡谷の入り口にたどり着いた。峡谷の上を、いとも簡単に向かい風に凧のように飛んでいる何羽かのコンゴウインコ達を畏敬の念を持って眺めていた。時々、かれらは一陣の風に吹き流され追い上げられるが、峡谷の入り口上空での旋回状態を取り戻すには、体を少しひねって、降下するだけでよかった。幅が狭く、先が尖がっているアカミミコンゴウの翼は、この谷

に見られるような風が強い状態に適している。彼らは、どこかに行くために飛んでいるのではなく、飛ぶのを楽しんでいるかのように私には思えた。

絶滅の危機にさらされているにも関わらず、この種のシステム的な繁殖調査は最近まで行われていなかった。1980年代と1990年代に行われた調査は、野生のアカミミコンゴウの個体数は2000から5000羽くらいと見積もっている。調査には多くの努力がなされてきたが、アカミミコンゴウの生態にはまだわからないことが多い。個体数の回復プロジェクトに取り掛かる時、一年の間、個体群の中で、何羽が繁殖活動をするのかという、重要な基準がまだわかっていなかった。これを念頭にいれながら、2004年1月始め、私はサンタクルスからバイクで現地に向かった。アカミミが見られる3つの主要川流域の地域；Rio Mizque, Rio Grande and Rio Pilcomayo のできるだけ広い範囲をカバーするつもりで。

この研究のゴールははっきりしている。3ヶ月という期間中に、アカミミコンゴウインコの巣を出来るだけ見つけ、それを報告するという。私自身は、現在の個体群がどこにいて、違法捕獲がどの程度起こっているのかを理解することにも興味があった。このリサーチをしていくにつれて、アカミミコンゴウの生息地に住んでいる人々の生活レベル、そして、より重要なこととして、アカミミやその他のオウム一般に対する彼らの考え方もわかってきた。普通の日には、川沿いの村へ行き、アカミミコンゴウの写真を見せながら、地元民と話をする。もしそこにコンゴウインコがいるなら、午後にはガイドを雇い、巣穴がある岸壁に連れて行ってもらう。そして、どの穴に何羽のインコが入っていくのかを見るために、この岸壁で暗くなるまで待つ。次の朝早く、どの穴が繁殖に使われているかを確かめるために岸壁に戻る。

アカミミコンゴウのつがいは、午後にはある穴に入るが、次の朝には同じ穴に戻らないということがある。このような場合、つがいは、将来の繁殖に使う馴染みの巣穴を確保するために、単に、単に入っていく可能性がある。アカミミコンゴウを観察していると、他のオウムが同じ岸壁に営巣しているのが見える。ベニガオメキシコインコ *Mitred Conures (Aratinga mitredi)*、アオボウシインコ *Blue-fronted Amazons (Amazona aestiva)*、オキナインコの亜種 *Cliff Parakeets (Myiopsitta monachus luchsi)* などである。オキナインコの亜種は、アカミミコンゴウと同じように、この乾いた谷だけに生息する。彼らは、本来のオキナインコと同じように、オウムとしてはめずらしく、小枝を集めて造った大きな巣を岸壁を作る。

ある忘れがたい経験がある。標高2700メートルの地点まで歩いて登り、アカミミコンゴウの営巣場所としてよさそうな所に観測場を建てた。午後になると冷え込み、風が強くなった。寝袋に入り、空を見上げる。世界の天井に寝ているような感じだった。キャンプの時はいつも食べるクラッカーを食べるため、夜明けの一時間前、マグロの缶詰を開けた。驚いたことに、アンディアン コンドルが、頭上500mくらいの所から、私のいる所近くにゆっくりと旋回して下りてきた。マグロ缶の匂いに寄ってきたのは間違いなかった。一羽ずつ、私の近くを何度か飛び去って行った。あまりに近くまで飛んできたので、全長3mにもなる翼の羽ばたきまで聞くことが出来た。こんなに大きく、威厳のあるものは見たことがなかった。子供の頃に想像した、翼竜のようだ。

アカミミコンゴウの岸壁で、コンドルを眺める機会はこれ以外にも何度もあった。アカミミコンゴウが好んで巣を作り、コンドルがとまるのに適している50-200mの岸壁がある。コンドルがやってくると、インコたちは一斉に岸壁から飛び出してくる。死骸などを食べるコンドルとアカミミコンゴウを食べる鷹「*Black-chested Buzzard-Eagles (Geranoaëtus melanoleucus)*」を間違えるからだ。

私の調査中に見つけたアカミミコンゴウの巣の数がより多かった場所は、皮肉にも人が住む場所に一番近かった。コチャバンバにあるミスケ川を挟んで、ペレレタとサンカルロスというコミュニティがある。“母なる岸壁”の二つのうちの最初のものは、泥で固められた一番近い家から400mと離

れていない。私は岸壁にこの名をつけたのは、これらの岸壁の間に21の巣穴があるからである。この数字は、2004年の調査時点で見つけたおおよそ1/3にあたる。このように沢山のアカミミが人間の近くにいるのは、最初は不可解に思えた。

私の訪問中に、地すべりがあり、サンタクルスとコチャバンバを結ぶ主要道路の一つが通行止めとなっていた。従って、アカミミの巣がある岸壁から30mしか離れていないところに、車は迂回していた。貨物トラックが通行し、入り口で巣を守っているアカミミの上にホコリが舞い上がった。鳥たちは、彼らの周りで起こっている人為的行為にさして困っている様子はなかった。実際、彼らが警戒しているのを見たのは、ハヤブサ「Peregrine Falcon (*Falco peregrinus*)」が突然現れ、逃げるつがいのアカミミに飛びかかろうとしている時だった。世界でも最も速く飛ぶ鳥が同じ生息地内にいるのだから、アカミミコンゴウが力強く飛ぶというのも驚くことではない。空中で逃げ延びた固体がその性質を遺伝によって次の世代に伝えたからこうなったのだ。

ペレレタとサンカルロスの状態は、アカミミがその生息地域全体で直面する問題の縮図といえる。自然の生息地が減少し（農業、薪、放牧により）、オウム達は、とうもろこしやピーナッツの作物を狙うようになる。これらのコミュニティで話したすべての人は、アカミミコンゴウを害鳥と見なし、彼らの言語で石オウムと呼ぶ代わりに、「とうもろこし食い」と呼ぶ。現地の人がこのように思うのも理解できる。殆どが自給自足の農家である。だから、オウム達が作物を食べれば、彼ら自身が食べそびれる。作物荒らしのコンゴウインコが撃たれる話は珍しくない。

これらのオウムがこの地域特有のもので、絶滅の危機にあるというのは現地の人にとって、聞いたこともないコンセプトなのである。殆どすべて訪れたコミュニティで、彼らは私にアカミミコンゴウを（ペット貿易などのために）捕獲したいのかと聞いてきた。この10年の間に、トラックでよそ者が到着し、オウムを「収穫」したという似たような話を彼らが教えてくれる。捕獲方法の描写は殆ど皆同じである。ピーナッツやとうもろこしをエサにして、地面にネットを張る。捕獲者達は、鳥が出来るだけ沢山地面に降り立つまで隠れて待ち、そして、ネットを一気に閉じる。

私は、繁殖期に捕獲者には会わなかった。捕獲者たちは乾季に活動する。乾季はヒナが巣立ち、アカミミ達がエサを求めて谷の中で移動を始める時だ。エサなどが限られ、あちこちに散らばっている場合、鳥達は群れをなすことが多い。残念ながら、アカミミのこの行動形式は、捕獲者が多くの鳥を一日で捕まえられるようにしてしまう。50から100羽が一般的に言われる数字である。捕獲者の手法は道理にかなっている。多くの鳥を一度に巣立った後に捕れる時に、岸壁の巣によじ登る危険を犯す必要があるだろうか？

捕獲のことを知らない遠く離れたコミュニティも少ないがあった。これらは、リオグランデとリオピルコマヨ沿いの地域に位置する。そこに行き着くことが、まず、大変だった。石が散らばる乾いた川底を10kmもバイクで縫うように走らねばならなかった。しかし、そこまでの価値はあった。すばやく流れ、泥茶のリオグランデから、大きなギザギザの峰峰が突然そびえ立つ。

私の案内人、Gidoは生まれてからの64年間ここに住み、面白い話にはことかかない。私が気に入った話は、チェゲバラが、ボリビア政府への反乱がうまくいっていない時期（1966-1967）にロバに乗って来た時のものだ。Gidoはチェに話し掛けるのが怖かった。当時、ラジオはチェを非常に危険な人物と呼んでいたからである。彼は自分の家に隠れ、この有名な革命家が川下を歩き回るのを見ていたという。

私は、その後、チェゲバラの「ボリビア日記」を読んだ。チェゲバラのゲリラ達は飢えていた。彼らは、群れをなし、川に水を飲みにくるオウム達を捕まえて食べた話があった。これはアカミミコンゴウの行動パターンであることを知っている私は、自分の研究対象をバーベキューにしていた社会主義のお気に入りの男達の一人を思い、ぞっとした。

Gidoの家での初日の日暮れに、40羽以上のアカミミが川の上流を飛んでいくのを見たので、次の朝早く、巣探しに出た。リオ グランデ沿いの地形は険しく、たった4 kmを歩くのに6時間もかかってしまった。時には、水のない高台があるところへ行くまでに岸壁沿いを少しずつ、川に腰までつかりながら進むこともあった。努力の甲斐合って、なんとか巣を一つだけ見つけた。他の鳥達がもっと上流の方で、営巣をしているのか、それとも、単に繁殖していない個体がいるだけなのかはわからない。だだ、地形が険しすぎて、この先には進めないということだけは、明らかだった。

Gidoの家に戻る途中、他の道を探るといふばかげたことをしてしまった。2時間登り続けた後、下まで200mはある岸壁の頂上にたどり着いた。行き止まりだ。もと来た道に戻るといふ賢い策をとらずに、川に降りてから戻ることを決心した。身軽になるため、まずは、ロープで、バックパックを降ろすことにした。川から15mの高さに到達するまで、事はうまく運んでいた。バックパックは川の高さ近くに既にある時、私は足を踏み外しそうになった。崖から石が落ち、バックパックにあたり、バックパックを川に落としてしまった。寝袋の空気を完全に抜いていなかったもので、幸運にもバックパックは浮いていた。主要な川から少し外れた水の流れが遅いところに落ちた事も「幸運」だった。

私は、バックパックが川下に流れているのを知りながら、この岸壁にしがみついていた。お金、双眼鏡、貴重な野外記録。すべてがああバックパックには入っていた。このパチャ ママ（母なる自然）にすべてを無くす状況に直面し、バックパックがリオ グランデに入る前にそれを取り戻せる唯一の方法を取った。身を任せたのだ。私は、砂利の上をはね、川へと落ちた。すぐに立ち上がると、水から出て、バックパックより早く走り、川にもう一度飛び込んで、やっと捕まえた。奇跡的にも、この落下から少しのかすり傷と、傷ついたエゴだけで逃れる事ができた。

2004年の繁殖調査結果は、将来の保護活動に役に立ついくつかのものを教えてくれた。私が目撃した約400羽の個体から、約20%のものしか繁殖していないようだ。見たところではこれは、やや低い数字だ。しかしながら、この数字は興味深い。なぜならWPTの研究者達が絶滅の危機にさらされているブラジルのバイアに生息するコスミレコンゴウインコ「Lear's Macaw (Anodorhynchus leari)」の概算があるが、その数に近い。アカミミコンゴウと同じように、コスミレコンゴウも大型の新熱帯オウムで、その乾燥し、低木の茂った生息地に限られる。コスミレコンゴウも大掛かりな捕獲と成鳥の射撃に苦しんだ。

アカミミの繁殖個体群の概算は、ヒナの生存率の情報で補正されなくてはならない。これらの重要な変数を今後のWPTの研究によって明らかにされることを期待する。殆どの繁殖活動はリオ ミスケの地域で見られる。リオ グランデとリオ ピルコマヨの流域にはかなりの数のアカミミがいたが、それに相応する巣が見当たらなかった。これらは繁殖活動をしていない固体である可能性もろし、何らかの要因が正確な数を把握する邪魔をしているのかもしれない。リオ グランデとリオ ピルコマヨの流域は地形が粗く道もないので、簡単にはたどり着けない。我々はこの地域に注目している。アカミミの個体数が分かっていないからだけではなく、ここが、将来の保護地区になる可能性があるからである。残念な事に、アンデスのこのユニークな谷には、まともに保護されている地域はない。ポトシ省には、トロトロ国立公園があるがあり、これは、この谷の一部も含むが、ヤギに荒らされている。ボリビア政府の環境庁は、保護地区の設立に興味があるが、まだ調査が十分ではない。将来できるかもしれない保護地区は、アカミミを守るだけでなく、この地域に特有の動植物の保護にも役立つだろう。特に、この辺りのサボテンの種の多さには感動した。ボリビアはメキシコに次、2番目にサボテンの種類が多い（ボリビア=200種以上で、70%は国に特有。メキシコ=750-800種）。

アカミミコンゴウの生息地を歩き、ここにはどれほどの鳥がまだ残っているのかを知るのがどれほど難しいのかがわかった。将来、他のアカミミがいる場所が見つかるだろう。しかし、その前に、

最悪の場合を考えて、現在分かっている個体群を守る行動を起こすべきである。すぐに手を打たなければいけない。例えば、乾季の違法貿易を止め、コンゴウインコと生活場を分け合っている人々の生活状況を変えなければ。ボリビアの現在の状態をすぐに変えることは難しい。2005年の政治不安は南米でもより貧しい国をより、不自由にした。その中でも豊かな省、例えば、サンタクルスとタリハなどは、政府から離れようとする政策を強めている。アカミミコンゴウが、絶滅寸前の数になるのを防ぐなどの問題もまったく解決できないというわけではない。しかし、パチャ ママ（母なる自然）だけに委ねては成し得ないのだ。

注釈＝パチャ ママ Pacha Mama は、ボリビアの真ん中にある乾いたアンデスの谷で使われるケチュア語とスペイン語の混ざったもので、母なる自然を意味する。

#### *Captions:*

For whatever reason, some Red-fronts are incredibly tame allowing observers to watch them from close range. どういうわけか、アカミミは人をあまり恐れず、我々がかなり近くで彼らを観察する事が出来る。

Although poaching of macaws from the cliffs is a primary concern for this project, these aren't the only targets. Even smaller parrots are also collected from tree cavities in a manner which destroys the tree for future use. このプロジェクトにとっての一番の心配事は、違法捕獲であるが、アカミミだけが狙われているわけではない。小さいオウムたちも巣穴から集められ、将来、また使われるはずであった巣穴も破壊される。

Highly social Cliff Parakeets - close relatives of the Monk Parakeet - are often found nesting in the same cliff with the Red-fronted Macaws.

Cliff Parakeets－オキナインコに近い親戚にあたる－は、アカミミの巣がある岸壁にいることがある。

Although the home of the Red-fronts is a dry landscape heavily grazed by goats, the plant and animal diversity remains remarkable: cacti are especially varied and abundant.

アカミミの生息している場所は、ヤギに植物を食べられた乾燥地域であるが、動植物の多様性は驚くべきものである。サボテンの種類は特に多い。

The Red-fronted Macaws and other parrots in these valleys are especially fond of corn, and some fields can be heavily impacted by repeated visits by hungry parrots. Understandably, this habit makes them especially unpopular with the local farmers and their families which depend on these crops throughout the year.

アカミミやこの谷に住むその他のオウム達は、特にとうもろこしが好きだ。場所によっては、これらのお腹のすいたオウムたちにかかなり荒らされた農地もある。だから、農作物に頼っている農家達が、オウムを嫌うのもわからなくもない。

Red-fronts, people and their agriculture are tightly linked in the foothills of the Andes. Here peanuts on the left and corn on the right - enjoyed by both people and parrots - are cultivated just below the cliff holding more Red-fronted Macaw nests than any other cliff in the world.

アカミミ、農家、そしてその農業はこのアンデスのふもとに密接している。ピーアカミミの巣がある岸壁の真下には、人とオウム両者によって利用されるナッツ畑が左に、とうもろこし畑が右にある。

Our visit in January of 2005 coincided with the very beginning of the year's breeding season for the Red-fronts, and many family groups included young birds like the one on the lowest perch here. Although we frequently saw them begging from their parents, they were generally ignored.

一番低いところに止まっているこのような若鳥も含めたアカミミの家族にとっての繁殖行動の始めである1月に2005年の調査が始まった。